

1. 挨拶 他力による効能

令和 6 年度総会の議案審議も皆様のご協力により無事済みしました。昨年度は企画会議による事業実施が活動の幅を広げ新たな体験を味わう機会となりました。今年はどんな企画が出るか楽しみです。

毎日の犬の散歩で岩手公園（盛岡城址公園）界限を行き来していますが、まったく気づかなかったことがありました。中津川に面した歩道寄りに大きな木が 20 本位並んで立っています。今、花が匂を迎えています。括りつけられていた名札に「ゆりの木」とあり花の写真が添えられています。どこに咲いているの？高木のため視線を上に向けると、何となくあれが花なのかも？だが、立ち止まってゆっくり見上げても花の形とか細かなところは認識できない、双眼鏡でも持参しないと写真のような花の観察はできなさそうです。また、緑色がかった色のためもあり花を見分けづらい。木の近くより中津川の対岸から全体を見渡せば花がついていることは見分けやすいと感じます。興味のある方はネットでお調べください。名前の由来どおりのきれいな花のようです。おかげで「ゆりの木」と花を知ることができ、ここを通る時の花の存在を気にするきっかけになった。このように身近なことにもきっかけを作らないと、知ることができないことが沢山あるでしょう。今年の企画もどんな体験が待っているか楽しみです。

2. 今年度の事業について

状況 いよいよ新しい年度が始まりました。5 月 22 日に総会・講演会が開催されました。総会・12 名の参加のもと無事に議案も承認されました。引き続き行われた講演会及び懇親会も盛況に終えることが出来ました。今年度も皆様のご協力宜しくお願い致します。

事業の実施予定

企画事業	3 回実施予定
会報	3 回発行予定



講演会 5 月 22 日（水） 菜園マイクロブリュワリー

（株）ベアレン醸造所 代表取締役社長 畠田 洋一 氏

『クラフトビールについて』

畠田社長からは、クラフトビールとはから始まって、ホップの効能やドイツのビール純粋令、下面発酵酵母の発見や、アンモニア冷凍機の発明や白熱電球の実用化によ

るビール界への影響などを詳しく解説して頂いた。また日本での動向として、1994年の規制緩和により全国的な地ビールブームが誕生した。しかし、2000年以降ブームは下火になり、淘汰の時代になった。しかし昨今は、マイクロブリュワリーの増加により、事業者が大幅にふえているが、市場規模は1-2%程度の事であった。岩手では岩手クラフトビールアソシエーション(ICA)が設立さ



【寫田社長】

れ、県内のクラフトビールは前年比112%の伸びで、県内の市場シェアは3%前後と見込んでいる状態である。これから県内ではますますの消費拡大が見込まれそうである。ベアレンについては、醸造所は2001年設立で、個人出資の独立起業である。また「ベアレン」はドイツ語で熊の意味で、岩手の自然とビール職人をイメージしたものであるとの事。最後に懇親会ですが、全体での飲食は2019年以來の開催で、大いに話が弾み、時間を忘れてしまうほどでした。深澤さんの乾杯にはじまり、千種さんの締めの挨拶まで、大いに盛り上がり7時過ぎに皆さん帰路につきました。

3. 会員の移動

退会会員	新たな会員の移動はありませんでした
入会会員	なし

4. コラム 『磯焼けって知っていますか?』

「磯焼け」という言葉を聞いたことがあるかと思う。磯焼けとは、「浅海の岩礁・転石域において、海藻の群落（藻場）が季節的消長や多少の経年変化の範囲を超えて著しく衰退または消失して貧植生状態となる現象」と定義されていて、いわゆる岩礁の海藻類の喪失現象である。北日本では特にムラサキウニなどによる食害の影響が大きいとされている。磯焼けが継続すると、海藻だけでなく、その群落に依存していた様々な生物に影響が



【磯焼けした藻場】

表われ「魚介藻類の減少や成長・成熟不良」が発生するとされる。特に三陸の磯場はアイナメの産卵場所でもあり、その影響は計り知れないと思う。すなわち「磯焼け＝藻場喪失」という事になる。ではこの磯焼けの原因は何であろうか？地球温暖化による海水温の上昇が一因となっていることは間違いないが、温暖化が磯焼けの全てとは言えない。現在三陸の藻場消失の主な要因は以下の通りだ。

- ・ウニ（キタムラサキウニ）による食害

温暖化による影響で海水温が上昇し、冬場でもウニの摂餌活動が活発に行われているため、海藻・海草が食べつくされてしまっている。従来ウニは水温5℃以下になると

摂餌活動が極端に少なくなると言われているが、近年では冬場でも水温が8℃程度の状態が続いており、通年でウニの摂餌活動が行われてしまっている。

- ・母藻・種苗供給数の減少

先述のとおり、ウニの食害を受け、海藻の消失が進んだことにより大型海藻類の胞子放出量が減少。天然で繁茂する海藻類が年々減少している。コンブ・ワカメ等の海藻類の成長には水温が影響し、低水温になると生育に好影響を及ぼす。通常、冬場の三陸の海域においては、11月頃に核藻場となるエリアからコンブ類の胞子放出が始まり、同時期に水温が低下し始めることでウニが休眠状態に、その間に大型海藻類が繁茂し春藻場を形成し、4月下旬から8月のウニ漁によって、ウニ密度が保たれ、核藻場が守られ、翌年の藻場形成まで同じサイクルを繰り返すという状態だったが、温暖化とウニの影響によりそのサイクルが崩壊している。

- ・漁業者の減少

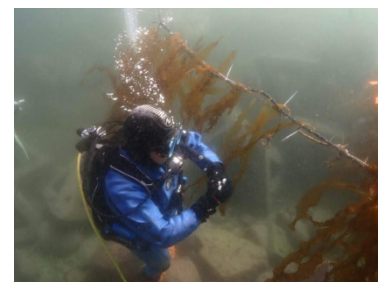
漁業者の減少によりウニの生存数が増加。残存個体が抱卵することで繁殖を繰り返し、ウニ密度上昇による食害進行と、痩せウニの増加が繰り返されている。漁業者も磯焼けエリアの痩せウニを採捕対象とはしないことから、天敵もいない環境下で、生息数を拡大し続けている。

以上が主な要因である。ではこの対策手段はあるのであろうか？対策手段の取り組みとして、大槌町藻場再生協議会の取り組みがある。この協議会は2021年に発足して、漁業者や漁協、行政、地域住民らで構成し、町内外のダイバー有志が海中調査やウニの移植などに取り組み他、地元小中学生向けの、海の環境についての授業も行っている。今回同協議会の大槌町役場の担当者に話を聞いてきた。



【大槌町藻場再生協議会】

それによると、大槌町海域では海水温が前年比3℃程度高く推移していて、ダイバーとして藻場再生の現場に入ってみたが、今年観測された生物として「グルクン」「ネンブツダイ」「チョウチョウウオ」「コロダイ」「ソラスズメダイ」「ミツボシクロスズメダイ」「メジナ」「ガンガゼ(稚)」etc.と上げればキリがないが、これらは5年ほど前から既に観測され始めており、年々生息期間と生息数を拡大している状況のようだ。1匹2匹というレベルではなく、多くの個体が確認されているようだ。



【海藻の移植作業】

海中での温度変化1℃は地上の10℃に匹敵するという人もいる。まさに今の三陸沿岸は温暖化地獄の状況にあると言って過言ではない。そういえば、最近のTVニュースで、岩手県沿岸で伊勢海老が捕獲されたという報道があった。まさに温暖化が進行している事の事例であろう。喜ばしい反面もあるが、秋サケやサンマの不良も頷けるものだ。しかし、今後も寒流を好む魚類の不良が続くことが大いに心配であ

る。今回の大槌町の取り組みは、水産庁の「海業の推進に取り組む地区」に指定され事にも、その重要性が伺われるものである。

5. 新たな会員の募集について

新規会員の紹介をお願い致します。会員増は会員の皆様の人脈だよりです。

本会報を使っても構いませんので、お知り合いの方へのお声かけお願いいたします。

連絡先 事務局 志田満

携帯 090-2791-1803 e-mail mitshida.9201@gmail.com

6. 編集後記 「ホタテ養殖の厄介者」

4月20日の岩手日報に、ホタテ養殖の厄介者という記事が載っていた。これは青森県陸奥湾で、養殖ホタテに謎の二枚貝が付着し漁業の妨げになっていて、この厄介者の正体が判明したという内容であった。そしてこの正体が、半世紀以上前に養殖試験のため持ちこまれた、欧州原産のカキであることが分かったというものである。そしてこれは「ヨーロッパヒラガキ」という種類で、渋みが強くシャンパンや白ワインに合うとされていたが、独特の渋みが当時の日本人の舌に合わなかったため、ほとんど流通もしなかったようだ。しかし、このカキが密かに陸奥湾で繁殖していたようだ。この厄介者は、山田湾のカキ養殖ででてくる「赤皿貝」のように、うまく処理して活用されればいいかと思うが、実際の流通までにはまだまだ道のりは長そうである。

志田